

2022年度版『看護学部の教育に関する点検・評価報告書』

1. 入学者選抜に関する点検・評価(要約版)

1) 取り組み

(1) 選抜方法について

- 本学部の入試においては、学生の他者への感情を言語化する力やコミュニケーション力に重点を置き、自ら考えて課題を解決する力を確認できる問題を取り入れている。また、看護職を目指すうえで必要な健康管理や、広い社会認識を確認する問題も取り入れている。

(2) 入学前課題への取り組み

- 合格した受験生に対しては、大学への継続教育を目的に、入学前課題を提供している。合格時期により、1～3課題を目安とし、論理的な文章表現、学生の考え方、学修姿勢、自己評価力などを確認している。提出課題ごとに、ルーブリック評価表をもとに自己評価を行い、自己の成長を自覚できる取り組みを行っている。提出された課題レポートは、入学後も、小人数制授業の基礎演習において継続的に活用しながら、個々の学生の状況把握と、対応を重視しながら支援している。

(3) 学習支援の取り組み

- 2022年度は、GPA導入に合わせ、個別的・包括的・継続的な学習支援体制の継続を行った。個別対応のチューター制度(学習支援)、相談役としての学年担当の配置、GPA・模擬国家試験の成績による小人数制の学習支援・2年次からの国家試験対策等の充実を図った。

2) 評価

- 選抜方法は、総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)、一般選抜入試、大学入試センター試験利用を設定している。選抜した結果の検証を行った結果、本学部の受験者の傾向は、高校における学修や意欲を評価する推薦型の希望が多い。推薦入試は、看護学部のアドミッション・ポリシーを反映しやすい入試形態である。また、総合選抜、推薦入試では、一定の学力水準を満たしていることを受験条件にして、出願書類(小論文含む)を確認し、さらにはそれらを総合的に見たうえで面接においてはそれぞれの要素における着眼点を面接評価に取り入れていることから、選抜方法は妥当といえる。
- 入学者の入学後の学修状況や追跡調査を行った結果、2023年の看護師国家試験(第112回)の受験者は、2019年の入学時60名に対し、卒業時編入者含む52名(86.7%)であり、合格者は46名(86.5%)であった。国家試験不合格者6名の入試区分形態は、6名全てが推薦入試入学者であった。

3) 課題と改善

(1) 入学前支援への取り組み

- 入学前課題の提示時期は、従来通総合型選抜未来デザイン入試の合格者からすべての課題、提出時期を提示していく。今後、合格から入学までの学修意欲を継続させるために、その都度ルーブリック評価表を用いながらレポートの添削を実施していくよう改善する。

(2) 新たな「学修支援」体制の整備

- 1年次後期から、1・2次生を対象に自由参加での学習会(人体の構造と機能を中心)を月2回で計画し、学修意欲の継続が図られるように改善する(2023年度後期より実施予定)。

(3) ピアサポート環境の整備。

- チューター制度における異学年交流の機会を充実させる。(実習前・卒業時・学祭等の企画)
- 弘前市との連携事業(街中キャンパス)、「認知症カフェ」など地域での取り組みに参加できるよう支援する。
- 入試形態別の入学生の学修成績の推移や、国家試験合否の分析を行い対策を検討する必要がある。

1. 入学者選抜に関する点検・評価

はじめに

本学部の入学者選抜の在り方について、入学者受け入れ方針(アドミッション・ポリシー)をふまえて検証する。

1-1 入学者選抜について

1) アドミッション・ポリシー

看護学部のアドミッション・ポリシーは、建学の精神「維新愛人」に基づく教育・研究を行い、豊かな人間性と深い教養を備え、高度の看護知識と技術に基づく科学的な看護実践能力を養い、広く人間社会の健康に寄与できる篤実有能な人材を育成することを目指している。

- (1) 人と触れ合うことが好きであり、人々の健康と生活を支える専門職を目指す意欲のある人
- (2) 大学生活を通して様々なことを自ら学ぶ姿勢を有している人
- (3) 入学後の学修に必要な基礎学力を有する人
- (4) 看護職として活躍していくためのコミュニケーション能力を身につける素地を有する人
- (5) 物事を論理的に考え、自分の考えを説明できる人
- (6) 他者に関心を持ち、多様な価値観を持つ人を尊重することができる人
- (7) 自ら力を発揮しながら様々な人と協力し、主体的に問題解決ができる人
- (8) 地域社会、国際社会に関心を持ち、貢献しようとする姿勢を有している人

2) 選抜方法

- 総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)、一般選抜入試、大学入試センター試験利用入試の4種を設定している。これらを組み合わせて、多様な資質を持つ人を求めている。ポリシーと入試形態は以下のように関連付けられている。
- 第1に、本学の入試の選抜方法として、総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)を重視している。4年間の学業継続において、「看護師になりたい」という明確な入学動機は「やり抜く力」に大きく影響する。面接を通して学生の目標や人間性、コミュニケーション力や他者との関係性等の姿勢を重視している。
- 第2に、一般入試等の試験においては、日本語の能力を重視している。自己の考えを他者に伝える言語力・医療チームで共有する看護記録の正確で分かり易い文章表現力などを達成できる素地を身につけていることが望ましい。また、多様な価値観や幅広い社会認識等に興味・関心を持っていることを確認するため、出題内容と関連させた面接内容を考慮している。
- 第3に、個々の受験生の内申書や、入学前課題の提供により、自己の健康管理や生活態度、学習への意欲なども大切にしている。
- 第4に、入学前課題のレポートは、入学後の基礎演習による少人数制の教育場面で活用されている。入学前のレポートと基礎演習でのレポートをループリック評価表を用いてその成長を可視化することで、自己の成長や課題が明確になることにつながり、継続的な取り組みの効果が見られる。

1-2 選抜の結果と点検。評価 (表1・表2)

1) 入試形態別の卒業生

2019年度入学生60名のうち、退学者は5名、留年者は2名でいずれも推薦型入試者であった。編入者1名を含め卒業生は52名であった。

● 表1. 入試形態別の卒業生・留年者

入試形態	入学時学生数	退学者	留年者
推薦型入試	48	5	1
一般入試	6	2	0
センター入試	6	0	0

2) 入試形態別の国家試験の成果

2019年度入学生 60名のうち、卒業時 52名のうち「2023年度看護師国家試験」の結果は、看護師国家試験の不合格者 6名全てが、推薦型入試者であった。保健師国家試験は 14名中全て合格で、推薦入試 8名、一般入試 3名、センター入試 4名であった。

●表 2. 入試形態別の看護師及び保健師国家試験の合否者

入試形態	卒業時学生数	看護師国家試験不合格者	保健師国家試験合格者
推薦型入試	43	6	8
一般入試	4	0	3
センター入試	6	0	4

1-3 まとめと課題

1) 取り組み

(1) 選抜方法について

- 本学部の入試においては、学生の他者への感情を言語化する力やコミュニケーション力に重点を置き、自ら考えて課題を解決する力を確認できる問題を取り入れている。また、看護職を目指すうえで必要な健康管理や、広い社会認識を確認する問題も取り入れている。

(2) 入学前課題への取り組み

- 合格した受験生に対しては、大学への継続教育を目的に、入学前課題を提供している。合格時期により、1~3課題を目安とし、論理的な文章表現、学生の考え方、学修姿勢、自己評価力などを確認している。提出課題ごとに、ルーブリック評価表をもとに自己評価を行い、自己の成長を自覚できる取り組みを行っている。提出された課題レポートは、入学後も、小人数制授業の基礎演習において継続的に活用しながら、個々の学生の状況把握と、対応を重視しながら支援している。

(3) 学習支援への取り組み

2022年度は、GPA導入に合わせ、個別的・包括的・継続的な学習支援体制の継続を行った。個別対応のチューター制度(学習支援)、相談役としての学年担当の配置、GPA・模擬国家試験の成績による小人数制の学習支援・2年次からの国家試験対策等の充実を図った。

2) 評価

- 選抜方法は、総合型選抜未来デザイン入試、学校推薦型選抜入試(ボランティア活動入試含む)、一般選抜入試、大学入試センター試験利用を設定している。選抜した結果の検証を行った結果、本学部の受験者の傾向は、高校における学修や意欲を評価する推薦型の希望が多い。推薦入試は、看護学部のアドミッション・ポリシーを反映しやすい入試形態である。また、総合選抜、推薦入試では、一定の学力水準を満たしていることを受験条件にして、出願書類(小論文含む)を確認し、さらにはそれらを総合的に見たうえで面接においてはそれぞれの要素における着眼点を面接評価に取り入れていることから、選抜方法は妥当といえる。

- 入学者の入学後の学修状況や追跡調査を行った結果、2019年度入学生 60名のうち、退学者は 5名、留年者は 2名でいずれも推薦型入試者であった。編入者 1名を含め卒業生は 52名であった。また、2019年度入学生 60名のうち、卒業時 52名のうち「2023年度看護師国家試験」の結果は、看護師国家試験の不合格者 6名全てが、推薦型入試者であった。保健師国家試験は 14名中全て合格で、推薦入試 8名、一般入試 3名、センター入試 4名であった。

垂線型入試者の看護師国家試験の不合格者が多い結果については、1~4年次までの成績の推移などを分析していく必要がある。保健師国家試験の合格者に、一般入試、センター入試での入学生が含まれていることは、多様な形態での入試選抜が効果を奏していると考えられる。2年次後期までの成績の結果で保健師課程へ受験の可否が決定する為、入学時の目標と、成績の推移に応じた学習支援の検討が必要といえる。

3) 課題と改善

(1) 入学前支援への取り組み

- 入学前課題の提示時期は、従来通総合型選抜未来デザイン入試の合格者からすべての課題、提出時期を提示していく。今後、合格から入学までの学修意欲を継続させるために、その都度ルーブリッ

ク評価表を用いながらレポートの添削を実施していくよう改善する。入学後基礎演習を担当する教員と情報を共有し、入学生の傾向を把握し入学後の支援に活用していくシステムを整備していく。

(2) 新たな「学修支援」体制の整備

- 1年次後期から、1・2次生を対象に自由参加での学習会(人体の構造と機能を中心)を月2回で計画し、学修意欲の継続が図られるように改善する(2023年度後期より実施予定)。
- 国家支援対策委員会の学年別の学修の取り組みに、1年次からの取り組みを追加し、1～4年次と段階的な国家試験対策が実施できるよう改善する。

(3) ピアサポート環境の整備。

- 各学年前期は個別面談を中心に継続的に実施する。科目の欠席状況を科目担当者に早期に伝え、学業の継続が図れるよう心理的な面からのサポートを継続する。身体症状などがある場合は、保護者への連絡や協働を図りながら、支援していく。コロナ下で字死できなかった異学年交流の機会を充実させる。(実習前・卒業時・学祭等の企画)
- 弘前市との連携事業(街中キャンパス)、「認知症カフェ」など地域での取り組みに参加できるよう支援する。
- 入試形態別の入学生の学修成績の推移や、国家試験合否の分析を行い早期に取り組みの対策を検討する必要がある。

2. 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価 (要約版)

1) 取り組み「資料③・④」

- 本学の教育理念、建学の精神、教育目標の実現を図るため、看護学部のカリキュラム・ポリシーに則り、教育課程を「教養科目」「看護基礎科目」「看護実践科目」の3本柱で編成し、1年次から「看護専門科目」を履修することで、看護専門職の役割や自身の将来像がイメージできるように構成した。
- 「看護実践科目」では、グループワークやディスカッション、ディベート、プレゼンテーション等の『アクティブラーニング』を積極的に取り入れ、学士力・社会人基礎力を培っている。
- 第5次カリキュラム改正を受け、2022年度入学生からは新カリキュラムとなり、「多職種と協働する能力」「地域・家族をみる能力」を強化するための科目として「プライマリヘルスケア実習Ⅰ」「健康づくり実習Ⅰ」を1年次前期に配置した。

2) 評価「資料⑤」

(1) カリキュラムの見直しについて

- 2022年度入学生からの新カリキュラムは厚生労働省が示す「保健師助産師看護師看護学校養成所指定規則」を満たしているが、第5次カリキュラムで見直しを指摘されている「臨床判断能力等に必要な基礎的能力強化のため解剖生理学等の内容を充実」については着手出来ていない。臨床判断能力は臨床実習においても援助を組み立てる根拠となる重要な能力であり、今後の検討が必要とされる。
- 2022年度「学修行動・学修成果アンケート調査」によると問21「本学の建学の精神について知っていますか」知らない・あまり知らない69.9%（看護学部）、問22「シラバスに記載されているCP・DPとは何かを知っていますか」知らない・あまり知らない67.7%（看護学部）と、知らない・あまり知らないと答えた学生は他学部と比較して多い傾向が見られた。カリキュラムや各科目内の教育内容は建学の精神やCP・DPは意識して構成されているものであるが、今後、学生に対する啓発と情報提供が必要とされる。さらに、学生にとってもわかりやすいCP・DPの検討が必要とされる。

(2) 学修行動・学修成果について

- 「授業出席の割合」は89.3%と3学部で最も多かった。定期試験受験資格が出席3分の2以上という規定があることや、毎回の出席確認は各科目で行われているため、授業へ出席するという基本的な学修行動はとれている学生が大多数であると言える。
- 「1週間当たりのレポート・課題に費やした時間」について90分以上は89.5%であり、「やっていない」学生は2.2%であった。

(3) 授業改善・学習サポートについて

- 2023年度FD研修会では、看護学部内の全教員が「ティーチングポートフォリオ」の作成に取り組んでおり、教育の質向上を図る。
- 2023年6月に看護学部1～3年生を対象に実施した、「学習サポートに関する調査」の結果では、学習サポートを目的とした講義や勉強会、質問の時間などがあれば参加を希望する学生は64名（83.1%）であった。特に看護援助の根拠となる「人体の構造と機能」に関する学び直しの機会を作る必要があると考え、2023年後期から2週に1回の学習会を計画している。

3) まとめと課題

- 2022年度の新カリキュラム導入に際して、アクティブラーニングを積極的に取り入れ、受け身ではなく能動的な学びを促進してきた。取り組むことができている学生がいる一方で、予習・復習・課題の時間の確保が難しく、全くできていない学生も存在している。
- カリキュラムの検討に加え、授業内容の充実や見直し等も行うにあたって、ティーチング・ポートフォリオ、ラーニング・ポートフォリオ、ルーブリック評価の導入を進めていく必要がある。
- 学生が学ぶにあたり、本学部のディプロマ・ポリシー、その達成に向けたカリキュラム・ポリシーを学生にもわかりやすい表現に工夫し、情報提供を行っていく必要がある。

2. 教育課程・カリキュラムに関する点検・評価

はじめに

本学部の教育課程・カリキュラムのあり方について、教育課程編成・実施の方針（カリキュラムポリシー）をふまえて検証する。

2-1. カリキュラム・ポリシーとカリキュラム編成について（資料①・②）

本学の教育理念、建学の精神、教育目標、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）の実現を図るため、以下の教育課程を「教養科目」「看護基礎科目」「看護実践科目」の3本柱で編成している。

—教育課程編成・実施の方針—

- (1) 多様な知識、多様な文化や価値観を理解するため、「人間と文化・社会」「人間と言語」「人間と自然科学」「総合科目」から構成する教養科目を設置する。
- (2) 必要な人体や病態を理解する専門科目の基盤として、「人体の構造と機能」「疾病の成り立ちと回復の促進」「健康支援と社会保障制度」の科目を看護基礎科目として設置する。
- (3) 看護を実践するための基本となる能力、看護ケアの展開能力、看護実践の中で研鑽する能力を修得するために、「看護の実践」「看護の統合」「臨地実習」などを体系的に学修できるように看護実践科目を設置する。
- (4) 保健師教育は選択制である。看護師、保健師はそれぞれの専門性と必修科目を2年次に、保健師選択の科目および相互の連携共同に関する科目を3年次に配置する。
- (5) 初年次教育から卒業後に向けての準備までの体系的キャリア教育プログラムに基づいた科目を配置する。

—教育方法と評価方法—

- (6) 大学における学修への円滑な移行を促すため初年次教育に関する科目を配置し、主体的学修への転換を図り、自ら探求する姿勢を育成する。
- (7) 3つのポリシーに照らした大学の取り組みの評価については、PDCAサイクルで行う。
- (8) 教育方法として、主体性とコミュニケーション能力を育成するために、地域活動および授業内での共同学習といった、多様で互恵的な学びの機会を設ける。
- (9) 各科目の内容に応じた適正な評価方法をシラバス（授業計画）に明記し、「姿勢・態度」「知識・技術」「思考力・判断力・表現力」「主体性・多様性・協働性」など様々な視点から学修成果の評価を行う。また、標準化された学習目標の到達度を適用し、専門職として必要な能力を評価する。

- 「看護実践科目」では、グループワークやディスカッション、ディベート、プレゼンテーション等『アクティブラーニング』を全科目で積極的に取り入れ、学士力・社会人基礎力を培っている。
- 第5次カリキュラム改正を受け、2022年度入学生からは新カリキュラムとなり、「多職種と協働する能力」「地域・家族をみる能力」を強化するための科目として「プライマリヘルスケア実習Ⅰ」「健康づくり実習Ⅰ」を1年次前期に配置した。

2-2. 点検・評価（資料③・④）

2023年3月に実施された『2022年度学修行動・学修成果アンケート調査実施結果報告書』および2023年6月に看護学部学務委員会が実施した『学習サポートに関する調査』から、カリキュラムの見直し、学修行動・成果について評価した。

1) カリキュラムの見直しについて

- 2022年度入学生からの新カリキュラムは厚生労働省が示す「保健師助産師看護師看護学校養成所指定規則」を満たしているが、第5次カリキュラムで見直しを指摘されている「臨床判断能力等に必要となる基礎的能力強化のため解剖生理学等の内容を充実」については着手出来ていない。臨床判断能力は臨地実習においても援助を組み立てる根拠となる重要な能力であり、今後の検討が必要とされる。

- 2022年度「学修行動・学修成果アンケート調査」によると問21「本学の建学の精神について知っていますか」知らない・あまり知らない69.9%（看護学部）、問22「シラバスに記載されているCP・DPとは何かを知っていますか」知らない・あまり知らない67.7%（看護学部）と、知らない・あまり知らないと答えた学生は他学部と比較して多い傾向が見られた。カリキュラムや各科目内の教育内容は建学の精神やCP・DPは意識して構成されているものであるが、今後、学生に対する啓発と情報提供が必要とされる。さらに、学生にとってもわかりやすいCP・DPの検討が必要とされる。

2) 学修行動・学修成果について

(1) 出席などについて

- 「1週間の登校日数」は5～6日が79.6%と3学部では最も多く、7日と答えた者も6.2%であった。看護学部は必修科目が多く、非常勤講師の講義は土曜日を開講される場合があることや、授業がない場合にも各科目の課題や臨地実習の事前学習等で登校する学生が多いと考えられる。
- 「授業出席の割合」は89.3%と3学部で最も多く、91.6%は「理由がなく欠席した授業」が2割に満たないと回答していた。定期試験受験資格が出席3分の2以上という規定があることや、毎回の出席確認は各科目で行われているため、授業へ出席するという基本的な学修行動はとれている学生が大多数であると言える。

(2) 授業などについて

- 「興味・関心のある授業」の割合は80%以上とする学生は18.6%と3学部で最も比率が高い。
- 「授業の難易度」では「やや難しい」「かなり難しい」を合わせると44.7%であり、3学部で最も高い。学年進行によって専門科目は多くなるが、各看護学を学ぶにあたっては1・2年次に履修する「人体の構造」「人体の機能」「病態論Ⅰ～Ⅳ」「病理学」「薬理学」等の基礎医学知識が根拠となる。1・2年次科目の理解が不十分なことによって、3・4年次の看護援助論や臨床実習での躓きに繋がる可能性も考えられる。
- 「授業に対する積極的な取り組み」については「よく取り組んだ」「かなり取り組んだ」を合わせると46%であった。看護専門科目ではほとんどの科目でアクティブラーニングを取り入れていることから、学生が主体的に授業に参加する環境は整えられている。

(3) 予習・復習などについて

- 「1週間当たりの自発的な授業の予習」については90分以上が41.6%であるが、「やっていない」とする学生も17.7%であった。授業の方法や課題によっても異なるものの、学習効果を高めるためにも具体的な予習の課題提示が必要となる。
- 「1週間当たりの自発的な授業の復習」については90分以上が46.0%、「やっていない」18.1%と「予習」と同様の傾向となった。

(4) レポート・課題への取り組みについて

- 「1週間当たりのレポート・課題に費やした時間」について90分以上は89.5%であり、「やっていない」学生は2.2%であった。他学部と比較して同様の比率ではあるものの、提出を求められている課題を提出できていない学生が2%おり、その後の学習にも支障をきたしている可能性がある。課題に取り組む際に困難となっていることを具体的に把握する必要がある。

3) 授業改善・学習サポートについて

(1) 授業改善について

- 授業評価アンケートの結果を参考に授業内容の改善を図る。
- 2023年度FD研修会では、看護学部内の全教員が「ティーチングポートフォリオ」の作成に取り組んでおり、教育の質向上を図る。
- 基礎演習をはじめとする演習科目ではルーブリック評価も導入され、その効果についての評価も行う必要がある。
- ラーニング・ポートフォリオの早期導入を図り、学生個々の学修状況に応じた指導やサポート体制について検討する必要がある。

(2) 学習サポートについて

- 2023年6月に看護学部1～3年生を対象に実施した、「学習サポートに関する調査」の結果では、

学習サポートを目的とした講義や勉強会、質問の時間などがあれば参加を希望する学生は 64 名 (83.1%) であり、学習サポートを行う場合の方法としては、「1. 教員からの講義」「2. 座談会のような勉強会」「3. 教員に対する質問時間を設ける」「4. 上級生への質問時間を設ける」の 4 項目を複数回答で答えてもらったところ、2 の座談会のような勉強会と答えた割合がやや多かったが、4 項目ともそれぞれに 20%以上の割合で希望があった。

- 4 年生については国家試験対策委員会で 3 年次後期から模試や学習会の機会を設けているが、1・2 年生についても今後の学修の躓きを最小限にするためにも、特に看護援助の根拠となる「人体の構造と機能」に関する学び直しの機会を作る必要があると考え、2023 年後期から 2 週に 1 回の学習会を計画している。

2-3. まとめと課題

2022 年度の新カリキュラム導入に際して、アクティブラーニングを積極的に取り入れ、受け身ではなく能動的な学びを促進してきた。取り組むことができている学生がいる一方で、予習・復習・課題の時間の確保が難しく、全くできていない学生も存在している。

また、カリキュラムの検討に加え、授業内容の充実や見直し等も行うにあたって、ティーチングポートフォリオ、ラーニング・ポートフォリオ、ルーブリック評価の導入を進めていく必要がある。

さらに、学生が学修を進めるにあたり、本学部のディプロマ・ポリシー、その達成に向けたカリキュラム・ポリシーを学生にもわかりやすい表現に工夫し、情報提供を行っていく必要がある。

3. 学修成果に関する点検・評価（要約版）

3-1. ディプロマ・ポリシーと学部教育の達成度について

看護学部のディプロマ・ポリシーはアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）に示した学力の3要素である「姿勢・態度」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」のそれぞれの視点から7項目が設定されている。2022(令和4)年度 弘前学院大学「卒業時アンケート調査」実施結果報告書の結果から、本学部の学生は、卒業時においてディプロマ・ポリシーを概ね達成できていると考えられる。

3-2. 学修成果の測定

- 学生の自己評価である学修行動・学修成果アンケート調査の学修成果についての結果からは、学生は教育理念(建学精神)にはあまり理解していないという結果が示された。
- 学修成果についての結果から、大学で身につけるべき能力を身につけることができていることが明らかになった。学修行動の結果からは、教員の指示による課題は行っているが、自発的な学習はほとんど行っていない可能性が考えられた。この自発的な学習の不足は「授業の内容を十分に理解することができていない学生」および「授業に対し意欲的・積極的に取り組んだといえない学生」の割合、国家試験合格率に影響している可能性が考えられる。
- 卒業時のアンケート調査の結果では、授業の内容を十分に理解することができていない学生が13.2%、学生生活全体を通じて、授業に対し意欲的・積極的に取り組んだといえない学生が10.2%もいた。
- 国家試験合格率は、2022年度の新卒者の保健師国家試験合格率を除き、新卒の全国平均値と比べて高いとはいえない状況であった。
- GPAの推移は学年が上がるにしたがって、GPA1未満と1以上2未満の学生数が増加することが明らかになった。

【課題】

- 教育理念(建学精神)について、これまで以上に理解を促す必要がある。
- 学生の自発的な学習を促すこと、または各授業においてこれまで以上の課題を課すことも考える必要がある。これにより「授業の内容を十分に理解することができていない学生」の割合の低下と国家試験合格率の向上につながる可能性がある。
- アンケート調査の結果は、考え方によっては授業の内容を十分に理解することができていない学生も卒業させている可能性があるとも受け取ることができる。したがって、厳格な成績評価を行うことで、国家試験合格率の向上につながる可能性が考えられる。
- 国家試験合格率を学修成果の評価指標として用いた場合、国家試験合格率に影響する要因は、入学者選抜、カリキュラムの構成、各授業の到達目標と成績評価、さらには教員組織による支援体制などが考えられるため、各々におけるさらなる詳細な調査が必要である。
- さらに、卒業時のアンケート調査や学修行動・学修成果アンケート調査の結果は学生全体の傾向をとらえることはできるが、それぞれの学生の成長の程度・過程をとらえることはできない。したがって、個々の学生の成長をとらえるための学修ポートフォリオの導入が望まれる。
- 2023年度の後期から、看護学部では学務委員会によって、おもに1年生と2年生を対象として学習サポート(勉強会)を行うことになった。この学習サポートの効果を踏まえて今後の学習サポートのあり方を検討する必要がある。

3. 学修成果に関する点検・評価

看護学部 of 学修成果について、学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）を踏まえて検証する。

3-1. ディプロマ・ポリシーと学部教育の達成度について（資料①・⑤）

看護学部においては、キリスト教主義精神による人間観に基づいた生命の価値、人間の尊厳について理解し、看護専門職を目指すものとして、常に倫理的姿勢を持ち、人々に関心を寄せるケアリングの実践者としての態度を身につけているとともに、高度の看護知識と技術に基づく科学的な看護実践能力をそなえていることを求め、以下のディプロマ・ポリシーを定めている。このディプロマ・ポリシーの実現を図るために、教養科目、看護基礎科目、看護実践科目に定められた各科目の卒業所要単位数を満たして、総計127単位以上を修得し、専門分野・領域における知識・技能を踏まえて諸課題の解決を主体的に図る姿勢を有し、次に掲げる能力を身につけた者に学位を授与するとしている。

看護学部のディプロマ・ポリシーはアドミッション・ポリシー（入学者受け入れ方針）に示した学力の3要素である「姿勢・態度」「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」のそれぞれの視点から7項目が設定されている。

「姿勢・態度」

1 福音主義キリスト教精神に基づいた幅広い教養と豊かな人間性、高い倫理観を持ち、生命の尊厳を重んじた看護ができる。

2 看護を必要としている一人ひとりの意思と独自性を尊重できる。

「知識・技能」

3 専門的知識と技能を習得し、エビデンスに基づいた基礎的看護を実践する能力を身に付けている。

4 社会の動向と医療・看護の進歩と変化に適切に対応できる能力を身に付けている。

「思考力・判断力・表現力」

5 知的好奇心をもって、主体的に問題を見つけ、考え、解決に向けて継続的に学習する能力を身に付けている。

6 医療チームの一員としての自らの役割を果たすために必要な協働と連携能力を身に付けている。

7 多様な文化と価値観を尊重し、国際的な視野から、健康課題を捉える能力を身に付けている。

評価

2022(令和4)年度 弘前学院大学「卒業時アンケート調査」実施結果報告書（以後、卒業時アンケート調査とする）の結果におけるディプロマ・ポリシーの「姿勢・態度」に関連する項目である「倫理観に培われた豊かな人間性」については、「身に付いた」を選択した学生の割合が50.9%、「どちらかという身に付いた」が43.4%で、合計94.3%の学生が身についたと自己評価していた。また「深く人間を理解する基礎的能力」についても、「身に付いた」を選択した学生の割合が56.6%、どちらかという身に付いたが35.8%で、合計で92.6%の学生がと身についたと自己評価していた。次に2022年度の卒業時のアンケート調査の結果におけるディプロマ・ポリシーの「知識・技能」の項目に関わる「看護実践能力」では、「身に付いた」を選択した学生の割合が39.6%、どちらかという身に付いたが58.2%、合計で97.8であった。卒業時アンケート調査の結果におけるディプロマ・ポリシーの思考力・判断力・表現力に関連する項目である「教養」、「主体性」、「協調性」、「責任感」、「リーダーシップ」、「判断力」については、「身に付いた」と「どちらかといえば身に付いた」を選択した学生の割合は、どの項目も合計で90%を超えていた。これらの結果から、本学部の学生は、卒業時においてディプロマ・ポリシーを概ね達成できていると考えられる。

3-2. 学修成果の測定およびその検証（資料③・⑤）

学修成果の評価指標としては「「学位取得率」、「看護師国家試験合格率」、「卒業時アンケート調査」、「学修行動・学修成果アンケート調査」、「グレード・ポイント・アベレージ」など、いろいろな指標があるが、これらの指標の中でも「卒業時アンケート調査」、「学修行動・学修成果アンケート調査」、「看護師国家試験合格率」、「グレード・ポイント・アベレージ」の結果を示す。

1) 学修成果に関わる項目 (資料③)

「教育理念(建学精神)」については、「知らない」と「あまり知らない」を選択した学生の割合が約70%であった。教育理念(建学精神)はオリエンテーションで説明しているが、記憶には残っていないようである。この点については、今以上に理解を促す必要がある。

「レポートや論文の作成について、書くために必要なスキル(書式や作法など)」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が約80%であった。

「教養的知識、基礎的スキル、専門的知識、専門的スキルが身に付いたか」という問いに対しては、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が80~90%であった。

「自己の資質・能力の変化、向上について」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が約85%であった。

「論理的に考える力」、「分析力、課題解決能力」、「批判的に考える力」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が約80%であった。

「プレゼンテーション能力」、「ディスカッション能力」、「他者とのコミュニケーションを図って相互に理解し合う能力」については、「身に付いた」と「やや身に付いた」を選択した学生の割合が約75~85%であった。

これらの結果から、学生は教育理念(建学精神)にはあまり興味がないが、大学で身につけるべき能力を身につけることができていると考えていると理解できる。

2) 学修行動に関わる項目 (資料③)

「1週間のうち大学に何日登校したか」については「5~6日」を選択した学生の割合が約80%であった。

「授業に出席した割合」については「80~100%」を選択した学生の割合が約80%であった。

「授業に対する取り組み」については、「ふつう」、「よく取り組んだ」、「かなり取り組んだ」を選択した学生の割合が約85%であった。

「1週間における自発的な予習時間」については、「やっていない」を選択した学生が17.7%、「90分未満」が36.7%、「90分~3時間」が30.1%、「3~4時間30分」が7.1%、「4時間30分~6時間」が4.4%であった。

「1週間における自発的な復習時間」については「やっていない」を選択した学生が18.1%、「90分未満」が34.5%、「90分~3時間」が27.4%、「3~4時間30分」が9.3%、「4時間30分~6時間」が5.3%であった。

「教員の指示による課題に費やした時間」については、「やっていない」を選択した学生が2.2%、「90分未満」が9.3%、「90分~3時間」が28.8%、「3~4時間30分」が24.8%、「4時間30分~6時間」が19.9%、「6時間以上」が13.3%であった。

これらの結果から、教員の指示による課題は行っているが、自発的な学習はほとんど行っていない可能性が考えられる。

3) 卒業時のアンケート調査の結果 (資料⑤)

2022年度の卒業時のアンケート調査の結果における「学生生活全体を通じて、課題や試験の準備に真剣に取り組んだ」という質問に対して、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を選択した学生の割合が合計で92.5%であった。一方、「学生生活全体を通じて、授業の内容を十分に理解することができた」という質問に対しては、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を選択した学生の割合が合計で83.0%、「どちらかというともう思わない」と「もう思わない」を選択した学生の割合が合計で**13.2%**であった。また学生生活全体を通じて、授業に対し、意欲的・積極的に取り組んだ」という質

問に対しては、「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を選択した学生の割合が合計で86.8%、「どちらかというと思わない」と「そう思わない」を選択した学生の割合が合計で10.2%であった。

今後の課題として、授業の内容を十分に理解することができない状態で卒業した学生についての、詳細な調査、例えば自由記述で、授業の何が理解できなかったのか、どの授業が理解できなかったのかなどの調査項目の追加が必要であると考えます。また意欲的・積極的に取り組んでいない学生の特徴（経済状況、家庭環境、あるいは自分がしたいこととのミスマッチ）を明らかにすることも必要かもしれない。

4) 国家試験合格率

国家試験については、国家試験対策委員会によって、学生の学習のサポートが行われている。

(1) 看護師国家試験

2021年度の本学の新卒者の看護師国家試験合格率が93.9%であるのに対して、新卒者合格率の全国平均は96.5%であった。また、2022年度の本学の新卒者の合格率は88.7%であるのに対し、新卒者合格率の全国平均は95.5%であった。

(2) 保健師国家試験合格率

新卒者の保健師国家試験合格率は2015年から全国平均を大きく下回っていたが、2022年度は全国平均が96.8%であったのに対して、本学の新卒者の保健師国家試験合格率は100%であった。

5) グレード・ポイント・アベレージ (Grade Point Average; GPA) の推移 (資料⑥)

GPAとは履修した科目の成績を平均値化したもので、学修の質を評価するものであり、学修成果・到達度を客観的・相対的に見ることが出来る指標である。成績評価（秀・優・良・可・不可）を成績値（グレード・ポイント、以下GPと示す）に換算してGPAを算出する。秀のGPは「4」、優のGPは「3」、良のGPは「2」、可のGPは「1」、不可のGPは「0」である。

下の表には2019年度に入学した学生のGPAの推移を示した。学年が上がるにしたがって、GPA1未満と1以上2未満の学生数が増加する。この要因についても不明であることから今後の検討課題である。

	下位1/4の人数	下位1/4の数値	1未満	1以上2未満	2以上3未満	3以上
2019年度1年生	14	1.98	0	14	41	4
2020年度2年生	11	1.83	0	20	34	3
2021年度3年生	16	1.85	1	23	35	3

3-3. まとめと課題

【まとめ】

- 本学部の学生は、卒業時においてディプロマ・ポリシーを概ね達成できていると考えられる。
- 学生の自己評価である学修行動・学修成果アンケート調査の学修成果についての結果からは、学生は教育理念(建学精神)にはあまり興味がないが、大学で身につけるべき能力を身につけることができていると考えていることが明らかになった。一方、学修行動の結果からは、教員の指示による課題は行っているが、自発的な学習はほとんど行っていない可能性が考えられた。この自発的な学習の不足は「授業の内容を十分に理解することができていない学生」、「授業に対し意欲的・積極的に取り組んだといえない学生」の割合、国家試験合格率に影響している可能性が考えられる。
- 卒業時のアンケート調査の結果では、授業の内容を十分に理解することができていない学生が13.2%、学生生活全体を通じて、授業に対し意欲的・積極的に取り組んだといえない学生が10.2%もいた。
- 国家試験合格率は、2022年度の新卒者の保健師国家試験合格率を除き、新卒の全国平均値と比べて

高いとはいえない状況であった。

- GPAの推移は学年が上がるにしたがって、GPA1未満と1以上2未満の学生数が増加することが明らかになった。

【課題】

- 教育理念(建学精神)について、これまで以上に理解を促す必要がある。
- 学生の自発的な学習を促すこと、または各授業においてこれまで以上の課題を課すことも考える必要がある。これにより「授業の内容を十分に理解することができていない学生」の割合の低下と国家試験合格率の向上につながる可能性がある。
- 授業の内容を十分に理解することができていない学生が13.2%、学生生活全体を通じて、授業に対し意欲的・積極的に取り組んだといえない学生が10.2%もいたことから、まずは、これらのさらに詳しい要因を調査する必要があると考える。
- またこれらのアンケート結果は、考え方によっては授業の内容を十分に理解することができていない学生も卒業させている可能性があるとも受け取ることができる。したがって厳格な成績評価が行われているのか否かも調査する必要があるのではないかと考える。また厳格な成績評価を行うことで国家試験の合格率の向上が期待できる。
- 国家試験合格率を学修成果の評価指標として用いた場合、国家試験合格率に影響する要因は、入学者選抜、カリキュラムの構成、各授業の到達目標と成績評価、さらには教員組織による支援体制などが考えられるため、各々におけるさらなる詳細な調査が必要である。
- さらに、卒業時のアンケート調査や学修行動・学修成果アンケート調査の結果は学生全体の傾向をとらえることはできるが、それぞれの学生の成長の程度・過程をとらえることはできない。したがって、個々の学生の成長をとらえるための学修ポートフォリオの導入が望まれる。
- 2023年度の後期から、看護学部では学務委員会によって、おもに1年生と2年生を対象として学習サポート(勉強会)を行うことになった。この学習サポートの効果も踏まえて今後の学習サポートのあり方を検討する必要がある。

【資料】

- ①弘前学院大学 学生便覧 2023
- ②弘前学院大学 看護学部 2023 講義概要(シラバス)
- ③2022(令和4)年度 弘前学院大学 「学修行動・学修成果アンケート調査」 実施結果報告書
- ④学習サポートに関する調査 看護学部 学務委員会 (2023.6.15 学科会議資料)
- ⑤2022(令和4)年度 弘前学院大学 「卒業時アンケート調査」 実施結果報告書
- ⑥看護学部ホームページのGPA制度(学修評価)の導入より抜粋